

一般口演

1. 感冒症状後に発症した右側方注視時の複視に対する鍼灸治療の一症例

吉村 英

吉村はりきゅう治療院

【目的】

感冒症状後に複視を発症。脳神経外科にて頭部MRI検査、眼科、耳鼻咽喉科受診し、右眼の動きの悪さを指摘された症例に対し鍼灸治療をおこない、症状の消失をみた一例を経験したため報告する。

【症例】

30代女性。〔主訴〕右側方注視時の複視。〔現病歴〕x-8日37.8°Cの発熱、頭痛、悪寒、食欲低下を伴う感冒症状を発症しx-6日に解熱。x-4日右側方注視時の複視を発症。x-3日脳神経外科を受診し頭部MRI検査の結果異常を認めず、同日眼科受診し、若干右眼の動きが悪いと指摘される。x-3日耳鼻咽喉科受診し副鼻腔炎と診断されたが複視との関係は否定的とのことで、当院に来院した。〔所見〕歩容、発話正常。手足のしびれなし。両側側頭部痛と頸肩部痛の訴えあり、右側方注視時に側頭部痛誘発される。頸肩部の筋緊張著明、後頭骨下縁に圧痛を伴う硬結を認め、閉眼にて水平眼球運動時に後頭下筋群の収縮を触知せず。

【治療・結果】

頸肩部の筋緊張緩和目的に完骨、天柱、天牖、肩井、大杼、和髎に置鍼10分間、頸部屈曲した座位で風池へ単刺をおこない(いずれも両側、深さ5~15mm、得気有り、風池のみ雀啄術)1週間後来院とした。使用鍼：40mm×0.18ステンレス製ディスポーザブル鍼(ユニコ製)。x+1日午前複視の軽減を自覚。x+2日複視消失。x+7日再来院、初回と同様の鍼灸治療をおこない、再発時に来院するよう伝え経過観察とし、5年後の来院時に再発がないことを確認した。

【考察・結語】

本症例は右眼の動きの悪さを指摘され、水平眼球運動による後頭下筋群の収縮を触知しなかったことから¹⁾、後頭下筋群の機能低下が眼球運動に障害を与え、複視を発症したものと考えた。後頭下筋群を含む頸肩部の筋緊張緩和を目的に鍼灸治療をおこない複視が改善されたと考察する。

【参考文献】

1) 平良 眞也ら：後頭下筋群が衝動性眼球運動に及ぼす影響について. Vol.36 Suppl. No.2 (第44回日本理学療法学会学術大会 抄録集) セッションID: P2-073

キーワード：複視、側方注視、後頭下筋群、鍼灸治療

一般口演

2. WHO国際統計分類に基づいた鍼灸臨床データ収集の基盤整備 第三報 鍼灸治療センター受療患者に対する伝統医学病証名・西洋医学病名・医療行為の調査

光野 諒亮¹⁾・鈴木 聡¹⁾・山本 晃久¹⁾・浦田 繁¹⁾・山下 幸司²⁾・陣田 恵子³⁾

- 1) 鈴鹿医療科学大学 保健衛生学部 鍼灸サイエンス学科
- 2) 鈴鹿医療科学大学 医用工学部 医療健康データサイエンス学科
- 3) 鈴鹿医療科学大学附属鍼灸治療センター

【目的】

2022年国際疾病分類第11版（ICD-11）に伝統医学が発効され、医療行為分類（ICHI）の開発も最終段階にある。今後はこれらが各国に適応され、我々は鍼灸分野も積極的にかかわる必要があると考えている。今回は鍼灸受療患者の伝統医学病証名、西洋医学病名、医療行為のコーディング状況を報告する。

【方法】

対象は、2023年4月1日～2024年3月31日における鈴鹿医療科学大学附属鍼灸治療センターの受療患者データとした。受付・会計システムから患者の延べ人数、性別、年齢、伝統医学の病名や証名（第1病証名のみ）、西洋医学の病名（第1病証名のみ）、医療行為（複数）を単純集計した。なお、個々のデータ収集は、鍼灸師1名が診療中に患者1名に対してICD-11に準じた伝統医学の病名や証名（仮訳）、ICD-10に準じた西洋医学病名、医療行為として刺す鍼、刺さない鍼、灸、吸角、電気、その他をコーディングし、受付・会計システムに入力している。

【結果】

患者数は延べ3873名、男1242名（61.3±19.3歳）、女2631名（60.0±16.7歳）であった。伝統医学の病証名はSC5Z痺症1001名、SF01瘀血症452名、SF90腎気虚症302名、SE90気虚症284名、SF97腎陽虚症283名、西洋医学の病名はM6281肩こり症585名、M5456腰痛症352名、M4806腰部脊柱管狭窄症262名、M5456慢性腰痛症205名、N979機能性女性不妊症164名にコーディングされていた。医療行為は刺す鍼・電気1171名、刺す鍼・灸・電気944名、刺す鍼510名、刺す鍼・灸445名、刺す鍼・電気・その他299名にコーディングされていた。

【考察・結語】

ICDやICHIに準じたコーディングによるデータ収集は、鍼灸臨床データの把握に有用と考えられ、本センターで伝統医学の病証名ではSC5Z痺症1001名、西洋医学の病証名ではM6281肩こり585名、医療行為では刺す鍼・電気1171名が最多と判明した。今後は受付・会計システムの改良を進め多施設で患者調査を実施し、鍼灸受療状況及び傷病名等の実態を明らかにしたい。

キーワード：WHO国際統計分類（WHO-FIC）、ICD-11、ICHI、鈴鹿医療科学大学鍼灸治療センター

3. 東邦大学における鍼灸に関する学部教育の現状報告

桑名 一央^{1) 2)}・増田 卓也^{1) 3)}・千葉 浩輝¹⁾・奈良 和彦¹⁾・田中 耕一郎¹⁾

1) 東邦大学医療センター大森病院 東洋医学科 2) くわな鍼灸治療院

3) 三井記念病院総合内科・膠原病リウマチ内科

前回の第41回日本東方医学会のメインテーマが「医師・医学生と鍼灸」であったことは記憶に新しいが、近年の東洋医学系学会では医学部や看護学部における東洋医学教育についての報告を目にする機会が増えて来ている。しかしながら、多くの報告が漢方教育に関するものであり鍼灸教育に関する報告は限られたものとなっている。

現在の鍼灸受療率が低率を改善していく一つの方向性として医師を含む多職種に対して鍼灸を認知してもらう努力が欠かせないが、学部での講義実施は認知度をを上げる格好の機会であると考えられる。

東邦大学では医学部は2009年から選択講義「東洋医学」内で、看護学部は2018年より同じく選択講義「東洋医学」内で鍼灸に関する講義が行われて来た。医学部および看護学部での講義と学生の反応などについて報告する。

4. 主訴以外の精神症状を見落とした一症例

白石 健二郎

田無北口鍼灸院

【目的】

頸部痛を訴える患者へ鍼灸治療を行い症状の改善が見られたが、局所の痛みだけに注目し精神症状を見落としたためその報告をする。

【症例】

40代 男性 会社員 X年 鍼灸施術開始。初診の2か月ほど前より頸部痛に悩まされる。

【治療および評価】

頸部（天柱穴・風池穴）の痛み、周辺の筋緊張改善を目的に週に1回、頸部や背部へ鍼灸施術を行った。天柱穴、風池穴、完骨穴に寸3、1番鍼2cmを10分置鍼。大椎穴、神道穴に台座温灸、百会穴に電子温灸を1回の施術で、痛みの自覚症状をVAS（ビジュアルアナログスケール）の尺度を用いて評価を行った。

【結果】

施術開始から約1か月後4回の施術で頸部痛が改善した。VAS70→20。

【考察】

本症例では頸部痛軽減目的で、疼痛部位周辺へ局所的な施術を行い症状が改善した。しかし初回施術中の会話で、問診時には気が付かなかった仕事の人間関係ストレスによる抑うつのような精神症状も出ていることが発覚した。会社休職も視野に入れていたため、鍼灸院ではこの症状の評価・施術は行わず心療内科へ通院するよう提案した。結果的に頸部痛改善と同時期に精神症状も消失したため心療内科への通院は見送ることになったが全身に注目し問診や治療を行っていればより早く精神症状にも気が付き、医療連携もスムーズに行えた可能性がある。鍼灸院で簡易抑うつ症状尺度（QIDS-J）などでの評価を行ってもよかったと反省される。

また頸部痛とこの精神症状は関連している可能性が高い。人類学分野では心の不調が身体に現れることを身体化と呼び、東洋医学では心身一如の考え方をする。

【結語】

頸部痛改善に鍼灸治療が有効であることが示唆された。同時に、主訴だけにとらわれないことも重要である。

キーワード：身体化、心身一如、医療連携、局所治療、身体観

一般口演

5. 心神と気滞のバランスを考慮し、灸と鍼の併用で改善した自律神経失調症の症例

藤本 新風

(一社) 北辰会

【背景】

精神緊張・不安を要因・誘因として身体症状を起こし、身体症状がまた精神緊張・不安を引き起こす精神交互作用が働いているケースは、臨床現場でよく遭遇する。鍼と灸を用いて心神と気滞とのバランスを取り、奏功した症例を紹介する。

【症例】

初診X年9月。70代女性。

40代前半頃から全身倦怠感・肩背部の凝り～頭痛の症状が出現し、複数の医療機関を訪ねたが、異常なし。X-11年に心療内科を受診し、自律神経失調症と診断された。

デパスとサインバルタを処方され、体感として効果は感じている。症状は緩和するが、薬を手放して元気に日常生活を送り、コンサートに行くなど外出を楽しめるよう元気になりたいため、某鍼灸院を8回ほど受診したが効果を感じなかった。友人の紹介を受け、当院受診に至る。

四診合参の結果、心血虚による心神不寧により七情刺激に対して過敏状態なために、容易に肝鬱気滞を引き起こし、症状を強く感じやすい状況にあると判断した。初診以後、心神の安寧を目的に神門穴に透熱灸をした後に、正気虚に配慮しつつ適宜、百会・肝兪・天枢等の1穴を選択して刺鍼を行った。以後1回/週のペースで来院し、初診直後から諸々の身体症状は改善しはじめ、2カ月後から、主治医と相談し減薬を始めた。X年6月末現在、サインバルタは廃薬し、デパスも服用せずに過ごせる日が増え、日常生活を元気に送り、外出も楽しむことが出来ている。

【考察】

心神不寧の状況では、些少の七情刺激で容易に肝鬱を生じ、痛みの閾値も低下する。心神の安寧を目的とした灸治を行ったうえでの刺鍼が効果的であった例だと思われる。

【結語】

東洋医学的身体観には「形神合一」という側面がある。全人的に患者の病態を把握した上で、治則治法に明確にし、的確な処置が必要であることは、湯薬・鍼灸いずれにおいても重要事項であろう。

キーワード：心神、心血虚、デパス、1穴、形神合一